

ラファエル・モネオの1966年-2021年の建築思想と建築作品にみる 【タイポロジー】に関する研究

A Study on 【Typology】 in Rafael Moneo's Architectural Theory and Works from 1966 to 2021

○増岡亮（大手前大学）*1 末包伸吾（神戸大学大学院）*2 後藤沙羅（神戸大学大学院）*3

*1 Ryo MASUOKA, Dept. of Architecture and Arts, Ottemae University, 6-42, Ochayasho-cho, Nishinomiya, 662-8552, masuoka@otemae.com

*2 Shingo SUEKANE, Graduate School of Engineering, Kobe University, 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 657-8501, suekane@people.kobe-u.ac.jp

*3 Sara GOTO, Graduate School of Engineering, Kobe University, 1-1, Rokkodai, Nada, Kobe, 657-8501, saragoto@people.kobe-u.ac.jp

キーワード：ラファエル・モネオ，建築作品，建築思想，タイポロジー，タイプ

1. はじめに

建築が生み出す世界は、「タイプ」によって記述されるだけでなく、「タイプ」を通して生み出されており、「タイプ」の定義と使用は、建築分野に不可欠なものである。また、「タイプ」は、既存の、あるいは新しく建つ建築物やその集合をさらに探求し、分析することを可能にする。そのような「タイプ」の概念を再考し、その答えを深めることは、均質化・多様化を経て、建築物が都市構造や歴史との連続性を失いつつある現代において、意義のあることと考える。

スペインの建築家ラファエル・モネオ(Rafael Moneo, 1937-)は、「建築におけるタイポロジーの問題を提起することは、建築作品の性質そのものに対する問題を提起することである」¹⁾とし、彼のこれまでの建築活動において【タイポロジー(typology)】および《タイプ》の概念を様々な時代、都市において発展させてきた。

モネオの建築思想及び建築作品の研究を行い、【タイポロジー】に関する概念及びその鍵語とそれらの定義の包括的かつ分析的な把握とともに、【タイポロジー】の概念がどのように建築空間として表現されているかを明らかにすることは、今後の建築思想の発展やデザインの実践の手がかりとなると考えられる。

2. 分析対象と方法

本論文における研究対象は、【タイポロジー】の概念を建築作品として数多く表現してきたラファエル・モネオの1966年から2021年までの建築思想及び建築作品である。

建築論の碩学ケネス・フランプトン(Kenneth Frampton, 1930-)によって批判的地域主義の建築家として位置付けられたラファエル・モネオは、【タイポロジー】を論じた建築家の一人である。

モネオは、「タイプとは...変化に対してオープンであり...変化の可能性を認識することである」¹⁾とし、さらに「過去において一貫したタイプの使用を可能にしていた構造、活動、形の連続性は、現代において深刻に崩れている」²⁾としながらも、「タイプという概念の面白さや価値が完全に否定されたわけではなく、タイプの問題を理解することは今日の建築物の本質を理解することである」¹⁾と述べている。

このように、時間の中で変化する社会的、都市的拘束の中で生まれ、都市組織の中で多様な関係を持ちながら柔軟に変化していく動的なものとして《タイプ》を捉えたモネオの【タイポロジー】に関する建築思想及びその表現手法を明らかにすることを目的とする。

モネオの建築思想と複数の作品を対象としている主要な既往研究として、2021年のTorres Rubio, Raúlによる研究^{注1)}があり、モネオの特定の年代(1972-1998年)に限定して6作品を対象とし、文脈、領域、持続可能性といった概念を通して分析されている。その他にも彼の建築思想や建築作品に関する論考があるが、本稿は、彼が自身の思想を著した彼の殆どの活動時期を包含する文献を対象に、それらを、KJ法を用いた思想の構造を明らかにする分析を行うことで、彼の建築思想の全体像を示そうとするものであり、こうした総体的かつ相対的な研究はこれまで行っていない。先述したTorres Rubio, Raúlによる論文と思想分析の対象は近接するものの、分析の視点や範囲、方法の点で大きく異なるものであると考えられる。

モネオは、文章を通して自身の思想を積極的に発信しており、これまでに、著書や作品集、雑誌を含め計10冊の著書を記している。本稿は、その中でも彼の建築思想を中心とする3冊に加え、雑誌に掲載された34の文献を分析対象とし、鍵語を抽出、考察を行う。建築家の思想を言説に即し検討する方法は数多く試みられており、特に建築家の言説をもとに思想を分析した研究として、奥山らの一連の研究^{3) 4)}、末包によるルドルフ・シンドラーの研究⁵⁾などが存在する。本稿では末包の言説分析の方法に準じ、思想を分析したのちに、その鍵語を踏まえて、空間形成手法及び空間体験、空間の特性に関する分析を行い、思想と空間の相互把握、評価を行う。

3. ラファエル・モネオの言説にみる建築思想の概念構成に関する分析

3-1. 分析の対象と方法

研究対象は、モネオの建築思想をまとめた論考が掲載された3冊の書籍(表1)と雑誌に掲載された34の文献(表2)である。これらの文献から主題となる言説を析出し、言

説に対応する鍵語を抽出の上、それらを概念的に階層化された項目として示し、それに基づき内容を分析することを通じて、現在に至る彼の建築思想を総体的かつ相対的に考究し、その特質を検討する。鍵語の抽出例は表 3、文献における鍵語の階層構成は表 4 に示した。鍵語は第 1 水準を【】、第 2 水準を《》，第 3 水準を []，第 4 水準を 〈〉で示し、文献から抽出した言説には“ ”を付し、文末に()により文献番号を示す。以下では第 4 水準までの主要な鍵語を対象に検討した。なお、第 1 水準の上位概念であるタイポロジーは 第 1 水準と同様に【】で示す。

3-2. 【タイポロジー (typology)】に関する言説の分析

モネオの【タイポロジー (typology)】に関して、【基礎概念】、【空間形成手法】、【空間体験】、【空間の特性】の 4 つの事項に関しての第 1 水準の鍵語を抽出した。モネオは、【基礎概念】を建築思想の礎とし、【空間形成手法】の鍵語にみられるようなプロセスを経て設計を行い、最終的に【空間体験】、【空間の特性】の鍵語にみられるような空間を目指している。以下では【基礎概念】、【空間形成手法】に属する、第 2 水準以下の鍵語に関する言説の主となるものを抽出し、検討する。

3-2-1. 【基礎概念】に関する考察

(1) 《現実 (reality)》

モネオが、設計の際の前提として重要視していることは、《現実》であると考えられ、それは以下のような言説からもわかる。

“形式的な構造としての型は、それとは対照的に、社会活動から建築物の建設に至るまで、膨大なヒエラルキーを持つ現実と密接に関係したものであるのだ。結局、型を定義する集団は、抽象的な幾何学と同様に、この現実根ざしていなければならないのである。” (I)

“建築物が出現した後の新しい現実のために残すべきものは何か、余分なものは何かを、現場の状況から見分けることは、建築家にとって非常に重要です。既存の敷地条件から、何を無視し、何を引き、何を消し、何を加え、何を变えるべきかを理解することは、すべての建築家にとって不可欠なのです。” (I)

彼は、設計する際に《現実》を読み解く必要があり、またその《現実》に建築物が根ざす必要があると考えている。

《現実》には、[生活]、[敷地]、[都市]、[風景]、[建設]が含まれる。また、新たな建築物が《現実》に根付いたのちに、その建築物を含んだ新たな《現実》となる必要があると考えていることが、以下の言説からも読み取ることができる。

“建築は、私たちの作品と私たち自身との間に距離を置くことを意味し、その結果、作品は物理的な一貫性を獲得した後、最終的に単独で、自立した状態で残ります。私たちの喜びは、この距離を経験すること、つまり、私たちの思考が、もはや私たちのものではない現実によって支えられているのを見ることにあるのです。さらに、建築の作品は、成功すれば、建築家を消してしまうかもしれない。” (5)

新たな《現実》としての建築物は、その《現実》によって支えられ、建築家の手を離れた、《自律的》なものになる。

表 1 ラファエル・モネオの建築思想に関する分析対象[書籍]

No	出版年	書籍名	出版社	著者
I	2010	RAFAEL MONEO. REMARKS ON 21 WORKS	The Monacelli Press	Rafael Moneo
II	2013	RAFAEL MONEO. INTERNATIONAL PORTFOLIO 1985 - 2012	Axel Menges Gm bH	Rafael Moneo
III	2015	RAFAEL MONEO. FROM THE IDEAL LINEAMENTS TO THE BUILT WORK	Herausgeber FSB Franz Schneider	Rafael Moneo, Brigitte Labs, Ehlert

表 2 ラファエル・モネオの建築思想に関する分析対象[文献]

文献番号	出版年	タイトル	収録刊行物	ページ
1	1966	A LA CONQUISTA DE LO IRRACIONAL	Arquitectura N° 87 Marzo	p. 1-6
2	1970	El desarrollo urbano de Madrid en los años sesenta	Cuadernos para el diálogo. Número Extraordinario	p.101-112
3	1978	On Typology	『Oppositions』 13	-
4	1980	10 ARCHITECTS IN VENICE	A + U-ARCHITECTURE AND URBANISM (121)	p. 50-55
5	1985	THE SOLITUDE OF BUILDINGS	Kenzo Tange Lecture	-
6	1985	PRIMAVERA SPRING 1985	THE SKETCH. RAFAEL MONEO 1967-2004	p. 12-19
7	1986	Museum for Roman Artifacts, Merida, Spain	『Assemblage』 No.1(Oct.1986)	p. 72-83
8	1988	THE IDEA OF LASTING A CONVERSATION WITH MONEO, RAFAEL	PERSPECTA-THE YALE ARCHITECTURAL JOURNAL (24)	p. 146-157
9	1990	Reflecting on two concert halls	Walter Gropius Lecture	-
10	1991	Kursaal : Cultural Center for San Sebastian, Spain	『Assemblage』 vol.14	-
11	1992	THE MURMUR OF THE SITE	ANYWHERE	p. 46-53
12	1993	AGAINST INDIFFERENCE AS A NORM	Anyway Conference	-
13	1994	Conversations with Rafael Moneo	EL CROQUIS N° 64. RAFAEL MONEO 1990-1994	p. 6-25
14	1996	Jose Rafael Moneo	『ANY』 vol.13	-
15	1998	END OF THE CENTURY PARADIGMS	Harvard Design Magazine	p. 71-75
16	1999	A CONVERSATION with Rafael Moneo	EL CROQUIS N° 98. RAFAEL MONEO 1995-2000	p. 6-27
17	2000	Article by Rafael Moneo	『Assemblage』 No. 41	-
18	2001	Today's Manners	『Building Material』 No.5	-
19	2002	La llamada "Escuela de Barcelona"	Revista de crítica arquitectónica, 2002, núm. 8.	-
20	2006	Construir sobre lo construido	AT Arquitectes de Tarragona	p. 4-11
21	2007	Rafael Moneo - Evolution of indeterminacy (Interview)	SPACE (479)	p. 151-167
22	2011	Homes and offices in Sabadell Barcelona, 2003-06	LOTUS INTERNATIONAL 148	p. 84-89
23	2013	in conversation with Rafael Moneo	ZARCH No.1	p. 348-361
24	2014	Interview: Architecture as a fact of culture	A + U-ARCHITECTURE AND URBANISM (520)	p. 118
25	2014	Rafael Moneo	A + U-ARCHITECTURE AND URBANISM (520)	p. 112-117
26	2014	Annual Architecture Lecture		
27	2015	Typology in the context of three projects: San Sebastian, Lacua, Aranjuez	JOURNAL OF ARCHITECTURE 20 (6)	p.1067-1087
28	2017	Building on history	ARCHITECTURAL REVIEW 242 (1447)	p.130-135
29	2017	National Museum of Roman Art	INTRODUCING ARCHITECTURAL TECTONICS: EXPLORING THE INTERSECTION OF DESIGN AND CONSTRUCTION	p. 263-278
30	2017	EDITORIAL	KULTUR-REVISTA INTERDISCIPLINARIA SOBRE LA CULTURA DE LA CIUTAT 4 (7)	p. 9-11
31	2018	Seeking the significance of today's architecture	Log, Fall, 2018, No.44	p. 35-44
32	2021	paisajes culturales	Arquitectura Viva 231	p. 22-48
33	2021	Memoria de la vida	Arquitectura Viva MONEO el profesor	p. 74-83
34	2021	Evocacion de la obra	Arquitectura Viva MONEO el profesor	p. 84-92

(1)-1: [生活(living)]

“都市には物理的な環境を人工的に変化させるという意味での道具であると同時に社会生活を支えるフレームとしての建築が求められている。” (5)

モネオは、建築が根ざすべき《現実》として [生活] を挙げている。その土地の気候や風習に基づいた [生活] に注意を払う必要がある。また、建築の内部構造のような、既存の [生活] に関わる《タイプ》の探求が求められる。

(1)-2: [敷地(site)]

モネオが、《前提条件》として [敷地] を重要視している

表3 ラファエル・モネオの建築思想に関する言説と鍵語の抽出例

番号	言説	構造化	鍵語
3-1	建築におけるタイポロジーの問題を提起することは、建築作品の本質そのものの問題を提起することである。 To raise the question of typology in architecture is to raise the question of the nature of the architectural work itself.	タイポロジーの問題を解決することは、建築作品の本質そのものの問題を提起することである。	タイポロジー 本質
11-5	不動という概念は、敷地という概念、つまり建物を永遠に保持する地面の存在に含意されている。 The idea of immobility is implicit in the concept of site, the presence of a ground that holds the building forever.	不動という概念は、敷地、つまり建物を永遠に保持する地面の存在に含意されている。	不動 敷地 地面

表4 ラファエル・モネオの建築思想に関する鍵語

	第一水準	第二水準	第三水準	第四水準	
タイポロジー	基礎概念	現実 (reality)	生活 (Living)		
			敷地 (site)		
			都市 (city)		
			風景 (landscape)		
			建設 (construction itself)		
		歴史 (history)			
		規律 (discipline)			
	空間構成手法	タイプ (type)	タイプ (type)	タイプの特定 (identify)	
				解釈 (interpretation)	
				直感 (intuition)	
タイプの変換 (transform)					
タイプの固定 (anchor)					
		形式的構造を規定する要素		構造 (structure)	
				ボリューム (volume)	
				広場 (plaza)	
				採光部 (lightning)	
				ファサード (façade)	
			屋根 (roof)		
			アプローチ (approach)		
			壁 (wall)		
			室 (room)		
			素材 (material)		
			開口部 (opening)		
			ヴォイド (void)		
			階段・スロープ (stairs/ramps)		
空間体験	視覚体験 (visual experiences)	視覚体験 (visual experiences)	対比 (contrast)		
			強調 (emphasis)		
			抽象化 (abstraction)		
	身体感覚 (somatic sensation)	身体感覚 (somatic sensation)	想起 (recall)		
			予期 (expectation)		
社会性 (sociality)	社会性 (sociality)	活性化 (activation)			
空間的特性	連続性 (continuity)	連続性 (continuity)	空間 (space)		
			時間 (time)		
			両義性 (ambiguity)		
	両義性 (ambiguity)	両義性 (ambiguity)	自律的-共生的 (autonomous - symbiotic)		
			固有性-普遍性 (singularity - generality)		
		物質性-抽象性 (materiality - abstraction)			

ことが以下の言説から読み取ることができる。

“敷地とは、建物の根が植えられる地面、大地であり、あらゆる建築物の必然的な第一の材料として考えられるべきものである。” (11)

“私がサイトの役割を理解する上で重要なのは、建築はサイトに属するものであり、建築はサイトにふさわしいものであるべきで、これらの属性を読み解き、それらがどのように現れるかを聞き出すものであるべきだという確信である。” (11)

“敷地は最初の材料であり、礎石であり、建築的思考を投影するためのフレームであると考えているのである。しかし、敷地は単なるフレームではなく、建築のプロセスにおいて正しい方向性を示す手がかりを与えてくれるものである。” (11)

彼は、[敷地] を“建築物の必然的な第一の材料”としている。また、建築物は [敷地] に属するものであり、建築家は [敷地] の“属性”を読み解く必要がある。ただ、[敷地] が自動的に建築物を決定するのではなく、建築的思考の正しい方向性を示す手がかりに過ぎないことが、以下の言説からも読み取ることができる。

“言い換えれば、建築、つまり一つの建物の建設は、敷地に対する自動的な、決定された反応ではない” (15)

そして、《現実》としての [敷地] に建てられた建築物によって新たな《現実》を生み出す意識が、以下の言説から読み取ることができる。

“敷地とその上に建物を建てる行為との間のこの必然的な対話は、建築の出現によって終わり、それによって敷地は変容し、その上に建物の存在によって生み出された新しい現実が現れる。” (15)

“私の建築は、都市の布地と呼ばれるものに適切に応答することを試みて構想されてきた。これらのプロジェクトはすべて、敷地に敬意を払い、敷地に含まれるようなふりをして、与えられた条件に対する新しい認識を生み出そうとするものである。” (15)

(1)-3: [都市(city)]

“都市と建築が単に類似した補完的な言葉ではなく、互いに切り離すことのできない結びつきがある” (I)

“都市と建築は、共通の現実の表裏として認識されていた。建築は都市の中でしか実現できず、都市は建築なしに形づくられることはない。” (I)

上記の言説のように、モネオは [都市] と建築は切り離すことができないものと考えている。また、[都市] の変化に対して、建築物が [都市] との時間的な《連続性》を保ちながら存続するためには、“建築の形態”に関する考察や、適切な《形式的構造を規定する要素》が必要であると考えていることが、以下の言説から読み取れることができる。

“問題は、過去の連続性を保ちながら、いかにして都市を進化させるかである。都市は雲のようなもので、その正確な形はある瞬間にそれまでの形から発展し、近い将来には消滅する運命にある。時間性、つまり建築の作品に時間が存在する方法は、建築の形態について効果的に考察することに関連する。” (13)

“都市の構造と建築の形式的な構造との間の弁証法的

な関係を理解することは、建築が適切に存続するために重要であり、必要であるとさえ思われる。”(13)

(1)-4: [風景 (landscape)]

下記の言説のように、モネオは《現実》として、[風景]についても意識している。

“周囲の風景に向き合い、その場所を探索し、耳を傾け、解釈することでこのプロジェクトに取組んだ。”(11)

“都市というよりも風景の一部であり、2つの山への敬意を表しながら、その地形に敬意を表している。”(1)

“敷地の消費は風景の回復、地理の救済をも意味する。建築は風景と融合し、風景と一体になろうとした。”(1)

モネオは、[敷地]を広範囲で捉え、[都市]環境や自然環境も含んだ[風景]に注意を払っていることがわかる。

(1)-5: [建設 (construction)]

“形式的な構造としての型は、それとは対照的に、社会活動から建築物の建設に至るまで、膨大なヒエラルキーを持つ現実と密接に関係したものであるのだ。”(3)

“私は、建築はこうしたメタファー的な使い方を超えて、実現されたとき、つまり物体としての存在を獲得したときに、その真の姿に到達すると考えている。建築は建設に囚われ、実質的な不動の中でその真の一貫性に到達し、その存在を固定化する。”(11)

“建物の建設は、確かに建築家によって指示される。しかし、建設が進むにつれ、物事存在がどの程度、建築家の手から離れていくかを認識できるのは、建築家のような人間ではない。建築家ほど、作品に関わる全てのオペレーターの重みを感じられる人はいない。”(13)

上記の言説の通り、モネオは、建築物の[建設]までをも、《現実》と捉え、建築家の手を離れた段階にまで注意を払っている。建築物が完成したのちの、物体として固定化される瞬間までを意識していることがわかる。

(2) 《歴史 history》

“型は建築の背後にある理由を説明し、それは歴史を通じて不変であり、その連続性によって、形と対象の本質との関連が理解され、型の概念が定式化された最初の瞬間の永続性が強化されたのである。”(3)

上記のように、モネオは、建築物が《連続性》をもつ前提として、《歴史》を捉えており、設計の際の前提として考えていることがわかる。

(3) 《規律 (discipline)》

モネオは、《規律》が建築に与える影響に関して関心を持っていることが以下の言説から読み取れる。

“都市の中には建築の規律と歴史を通じて型の永続性により与えられる自律性の証明が収められている。”(3)

“私が新しいプロジェクトの研究を始めたときの最初の関心事は、私たちが実践している「規律」である建築が、どんなにシンプルな建築であっても、そこに潜む問題の解決にどのように貢献できるかを明確にすることです。言い換えれば、建築家が与えられた状況を明確にし、場所に意味を与え、計画を満足させるために用いる規律で何ができるかを知ることである”(6)

そして、以下の言説が示すように、《規律》や《歴史》は、新たな《タイプ》の形成に必要なだが、我々を取り巻く《現

実》に対する“解釈”によって、“個性”が生まれ、[固有性-普遍性]を持つことが可能になるという、《規律》の枠を超えたプロセスがあることを認識する必要がある。

“新しいタイプが出現したとき、つまり、建築家が新しい建物や要素のグループを生み出す新しい形式的関係のセットを記述できたとき、その建築家の貢献は、規律としての建築を特徴づける一般性と匿名性のレベルに到達したことになる。”(3)

“解釈は、私たちを取り巻く世界を観察するためのフィルター、個人的なレンズであるため、建築家の個性を肯定する力を持っている。しかし、その個性は、間違いなくプロジェクトの条件に左右される。建築家は、建築の規律の枠を超えたプロセスであることを認識し、そのインプットを受け入れなければなりません。”(1)

3-2-2. 空間形成手法に関する考察

(1) 《タイプ (type)》

“型とは何だろうか。それは、最も簡単に定義すると、同じ形式的な構造によって特徴づけられるオブジェクトのグループを記述する概念である。”(3)

“これは、全体を規定する要素の関係によって生成される類型的系列の概念に直接つながるものである。型は、そのような類型的系列を形成する要素の存在を意味し、もちろん、これらの要素自体がさらに検討されて単一の型として考えられるが、それらの相互作用によって正確な形式的構造が規定されるのである。”(3)

上記の言説が示すように、モネオは、《タイプ》を定義しており、その《タイプ》は、類型的系列を形成する“要素”の相互作用によって形成され、《形式的構造を規定する要素》である。そして、その《タイプ》は、操作の対象であることが以下の言説から明らかになる。

“タイプという概念を明確に操作することで、確立されたタイポロジーがいかに多様な可能性を持つかを示している。”(27)

また、《タイプ》は、建築物としての固有性を持ちながら、より広い構造の一部に属するという《両義性》を持った概念であることが、以下の言説からわかる。

“実際、このタイプは、建築という作品が、ユニークでありながら、より広い構造の一部として考えられたときにその完全な意味を獲得する一連のオブジェクトに属するという、この両義的な概念の認識を意味する。”(13)

(1)-1: [タイプの特定 (identify)]

《タイプ》は、設計のプロセスに関わり初めに[タイプの特定]をする必要があることが以下の言説から読み取れる。

“設計のプロセスは、建築家が、自分が作業している状況に内在する問題を解決するための型を特定することから始まる”(3)

“タイプの特定は、建築家が社会との結びつきを必然的に確立するための選択であった”(3)

(1)-2: [タイプの変換 (transform)]

モネオは、《タイプ》を変化するものとして捉えており、そのような《タイプ》は、《歴史》が要求する継続的な弁証法に必要であると考えていることが、以下の言説から読み取れる。モネオにとって、設計プロセスにおける《タイプ》

を「変換」する過程は必要なのである。

“型は、形式的な構造を構成する実質的な要素が変化することによって、変容する、つまり、ある型が別の型になるのである。” (3)

“型は「変化が作用するフレーム」として考えることができ、歴史が要求する継続的な弁証法に必要な用語である。” (3)

“この継続的な変容の過程において、建築家は型から外挿し、その用途を変えることができます。また、既知の型を別の文脈で正式に引用したり、すでに採用されている技術を根本的に変えて新しい型を創造したりすることもできます。建築家の創意工夫によって、さまざまなメカニズムが生み出されているのである。” (3)

(1)-3: [タイプの固定(anchor)]

“偶発的なものから派生した幾何学を具体化する機会を提供し、その専門的知識を利用した。” (1)

“建築は建設に囚われ、実質的な不動の中でその真の一貫性に到達し、その存在を固定化するのです。” (11)

上記の言説が示すように、《タイプ》は、変容するものでありながら、建築物として具体化され、《現実》や《歴史》、《規律》と紐づき、[固定]されるものである。

4. ラファエル・モネオの建築作品にみる【タイプロジー】における【空間形成手法】に関する考察

4-1. 分析の対象と方法

研究対象は、モネオの建築作品 100 作品のうち、十分な資料がある 32 作品とする。分析項目は、モネオの建築思想の概念構成のうち、【空間形成手法】に該当する鍵語とする。《形式的構造を規定する要素》に関する整理 (図 1) を行なった上で、それぞれの《形式的構造を規定する要素》の、【基礎概念】との関係、および [タイプの特定]、[タイプの変換]、[タイプの固定] のどのプロセスに属しているのかについての検討 (図 2) を行う。以下では、これらの分析を経て、[タイプの特定]、[タイプの変換]、[タイプの固定] それぞれのプロセスに属する主要な《形式的構造を規定する要素》と、それらの要素に対する操作について検討した。

4-2. [タイプの特定]

《タイプ》の形成過程のうち、[タイプの特定]に属する主要な《形式的構造を規定する要素》として、〈ボリューム〉、〈アプローチ〉、〈構造〉が挙げられる。

〈ボリューム〉に対する操作としては、“周辺環境から決定された配置、幾何学”、“ボリューム間の幾何学的な対比” “ボリューム間の大きさの対比”、“囲いとしてのボリューム” が主にみられた。

〈アプローチ〉に対する操作としては、“周辺環境と接続するためのエントランス配置”、“視界を遮断、限定するアプローチ”、“既存のアプローチからの位置の変更”、“〈広場〉と一体化したアプローチ” が主にみられた。

〈構造〉に対する操作としては、“過去の様式と現代の技術の融合”、“全体を規定する構造単位の連続” が主にみられた。

4-3. [タイプの変換]

《タイプ》の形成過程のうち、[タイプの変換]に属する

主要な《形式的構造を規定する要素》として、〈構造〉、〈広場〉、〈ファサード〉、〈開口〉が挙げられる。

〈構造〉に対する操作としては、

“規則正しい架構に対する不規則な要素の挿入”、“構造体の簡素化による背景化”、“斜めのグリッドによる空間の抽象化”、“古い技術に対する現代的な建材の挿入”、“柱列の意図的な繰り返し” が主にみられた。

〈広場〉に対する操作としては、“周辺環境との対立を調停する庭園・水盤の挿入”、“複雑な地形を解決する公園のレイアウト”、“ボリュームと広場の繰り返し”、“異なる複数の方向性を融合する広場” が主にみられた。

〈ファサード〉に対する操作としては、“イメージを生む開口部の幾何学的な配置”、“構造の表出”、“スクリーンとして機能するファサード” が主にみられた。

〈開口〉に対する操作としては、“開口部の限定”、“意味を与える幾何学的な配置”、“素材感を生かす開口” が主にみられた。

4-4. [タイプの固定]

《タイプ》の形成過程のうち、[タイプの固定]に属する主要な《形式的構造を規定する要素》として、〈素材〉、〈採光〉が挙げられる。

〈素材〉に対する操作としては、“地域素材、既存建築に用いられている素材の選択”、“ある要素を強調する素材の配置、パターン”、“周囲の建築との親和性を確保する素材

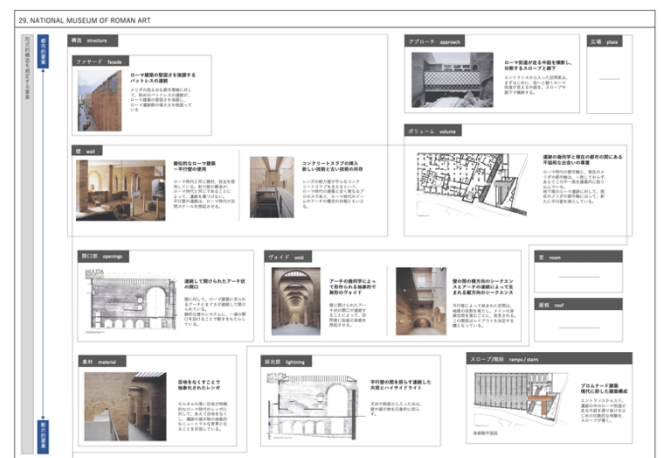


図 1 《形式的構造を規定する要素》に関する整理

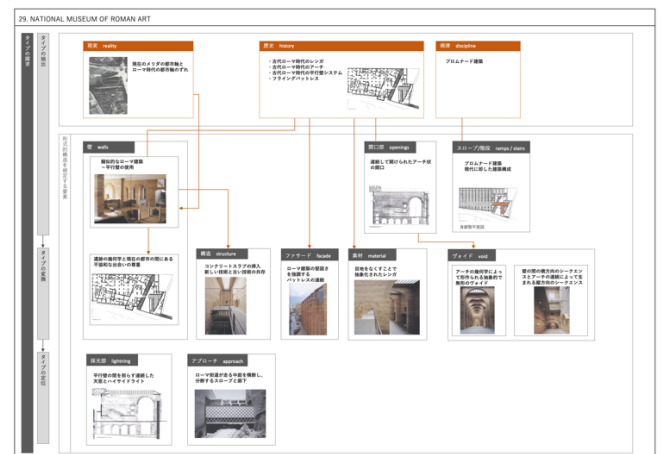


図 2 《形式的構造を規定する要素》と《タイプ》との関係の検討

の選択”が主にみられた。

〈採光〉に対する操作としては、“構造単位，屋根システムとの連動”，“反射を生む要素とその配置”，“天窓，ハイサイドライトの連続した配置”が主にみられた。

4-5. 考察

モネオの《タイプ》の形成に関して，[タイプの特定]の段階では，〈ボリューム〉の幾何学やその配置といった外郭の決定，周辺環境との関係を生む〈アプローチ〉の決定，建築の内部構造に関わる〈構造〉の決定という，主に3つの傾向があり，それらの選択や相互作用によって，[タイプの特定]がなされていることが明らかになった。[タイプの変換]の段階では，それぞれの要素に対して，新たな要素の挿入や，要素の限定，繰り返しといった操作を主に行うことで[タイプの変換]を行なっていることが明らかになった。そして，[タイプの固定]の段階では，〈素材〉や〈採光〉といった建築物を具体化する要素に対して，地域の気候や風習を参照しながら操作を行なっていることが明らかになった。

5. ラファエル・モネオの建築作品にみる【タイポロジー】における【空間体験】および【空間の特性】に関する考察

5-1. 分析の対象と方法

研究対象は，前章で扱った32作品のうち，[タイプの特定]に関わる3つの傾向に着目し，作品を分類した上で6作品を選定する（表5）。分析項目は，モネオの建築思想の概念構成のうち，【空間体験】と【空間の特性】に該当する

表5 分析対象作品リスト

No	年	作品名	所在地	用途
10	1996-2009	SOUKS IN BEIRUT	Beirut, Lebanon	Commercial ¹
11	1996-2002	CATHEDRAL OF OUR LADY OF THE ANGELS	Los Angeles, USA	Religious
16	1992-2000	AUDREY JONES BECK BUILDING, MUSEUM OF FINE ARTS	Houston, USA	Cultural
20	1990-1999	KURSAAL AUDITORIUM AND CONGRESS CENTER	San Sebastián, Spain	Cultural
24	1987-1994	L'ILLA DIAGONAL	Barcelona, Spain	Commercial ¹
29	1980-1986	NATIONAL MUSEUM OF ROMAN ART	Mérida, Spain	Urban

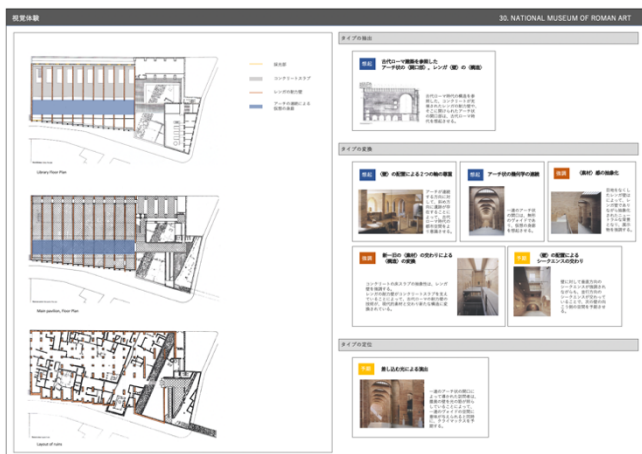


図3 (空間体験)(空間の特性)に関する分析図の例

鍵語とする。ここでは，前章で明らかになった，《タイプ》の形成過程に関わる《形式的構造を規定する要素》とそれらに対する操作が，実際の空間において，如何に【空間体験】や【空間の特性】と関係しているのかを分析図（図3）を用いて明らかにする。ここでは，主要な1作品「NATIONAL MUSEUM OF ROMAN ART」に関して事例的検証を示す。

5-2. 「NATIONAL MUSEUM OF ROMAN ART」の事例的検証

5-2-1. 空間体験《視覚体験》に関する検証

(1) [対比]

古代ローマの遺跡の上に建つ建築は，古代ローマの都市軸と現代の都市軸という2つの軸を尊重し，その「ずれ」によって[対比]を生み出している。また，壁構造によるこの建築物は，古代ローマの〈素材〉の参照によってレンガに覆われており，そこに「挿入」されたコンクリートスラブや金属製の手すりによって〈素材〉間の[対比]が生み出されている。

(2) [強調]

この建築の〈ファサード〉は，斜めのバットレスの「連続」によって構成されており，ローマ建築の堅固さを[強調]している。

(3) [抽象化]

レンガ壁の目地をあえて目立たなくすることで，レンガという具体的な〈素材〉を用いながら，背景となることを目指している。また，アーチ状の幾何学の〈開口〉が「連続」することによって，無形の〈ヴォイド〉として，空間が[抽象化]されている。

5-2-2. 空間体験《身体感覚》に関する検証

(1) [想起]

アーチ状の〈開口〉の「連続」による無形の〈ヴォイド〉は，体験者に仮想の身廊を[想起]させる。

(2) [予期]

アーチ状の〈開口〉の「連続」によって，その〈開口〉を通り抜けるという行為も繰り返され，次の空間を[予期]させる。また，同じ構成単位の「連続」による空間構成には，〈採光〉も含まれており，繰り返される天窓やハイサイドライトの光が照らす先を[予期]させる。

5-2-3. 空間の特性《連続性》に関する検証

(1) [空間]

現在の都市軸に沿って，〈構造〉を決定しており，周辺との《連続性》を確保している。また，レンガ〈壁〉と〈開口〉の「連続」によって，空間体験として《連続性》を持っているといえる。

(2) [時間]

〈素材〉は，古代ローマを参照したレンガと現代的なコンクリートや金属が「選択」されていることによって，[時間]的な《連続性》を確保している。

5-2-4. 空間の特性《両義性》に関する検証

(1) [固有性-普遍性]

この建築の工場のような〈屋根〉形状は，モネオの他の建築作品でもみられ，その[普遍性]を自覚していたと思われる。しかし，その〈屋根〉と〈採光〉，またその下で照らされる〈壁〉や〈素材〉との相互作用によって，[固有性]を表している。

(2) [物質性-抽象性]

《素材》の使用方法に、《両義性》が表れている。レンガという具体的な[物質性]を持った《壁》は、その目地を目立たなくしていることによって、一枚の《壁》としての[抽象性]を獲得し、ニュートラルな背景となっている。

5-3. 考察

モネオの【空間体験】や【空間の特性】と《形式的構造を規定する要素》との関係において、主に断片的なスケールの小さい要素に対する操作が多くみられることがわかる。また、《タイプ》の形成過程における、[変換]と[固定]の過程において、【空間体験】や【空間の特性】に影響を与える操作が多くみられた。

6. まとめ

これまで、モネオの【タイポロジー (typology)】に関して、言説や建築作品を対象に分析、考察してきた。それらの考察を踏まえた概念構造図を以下に示す。(図4)

【タイポロジー】はこれまで様々に論じられてきた。ジャン＝ニコラ＝ルイ・デュラン(1760-1834)は、「モデル」のリストを提案し、建築物を固有の歴史や土地の文脈、また美的な価値判断から引き剥がし、視覚的・形式的な《タイプ》を抽出した。一方、新古典主義者カトルメール・ド・カンシー(1755-1849)は、「モデル」と《タイプ》の区別を行い、《タイプ》を幾何学的方法論として捉えている。また、アラン・コフーン(1921-2012)も、カトルメールと同様の姿勢をとっており、【タイポロジー】は道具として、あるいは歴史の枠組みとして用いることができるとしている。

そして、建築の問題を解決するために、《タイプ》を操作する必要があるとしている。モネオは、《タイプ》を、《歴史》、《歴》、《規律》と深く結びつき、変容していくものとして定義しており、その点において、デュランとは立場を異にする。また、モネオは、《タイプ》を操作の対象として捉えている点で、カトルメール、アラン・コフーンと同様の姿勢をとっているが、《タイプ》から学び、《タイプ》を変換し、新たな《タイプ》を形成しようとしている点においては、さらに発展的である。

また、アルド・ロッシ(1931-1997)も同様に【タイポロジー】について論じているが、特定の都市から取り出した形態的な《タイプ》の普遍的な使用により、彼の《タイプ》は、自分自身と理想的な文脈とのみ通信しているに過ぎない。それに対してモネオは、様々な場所において、特にその場所の《現実》と強く結びついた《タイプ》を形成している点で、ロッシとは異なる。

現代建築を考えるにあたって、建築物が過去から現在までの時間的・空間的《連続性》を有することは不可欠である。モネオは、その場所の《現実》、《歴史》に目を向け、《規律》という知識に支えられながら、《タイプ》を形成する。そして、建築物が建つことによる新たな《現実》までを意識する彼の建築は、建築物が《連続性》を持つ必要性を我々に提示している。また、多様化が進み続ける現代において、[固有性-普遍性]を併せ持つ《両義性》を有するモネオの建築は、周囲の環境の変化に耐えうるような未来との《連続》の獲得につながる。

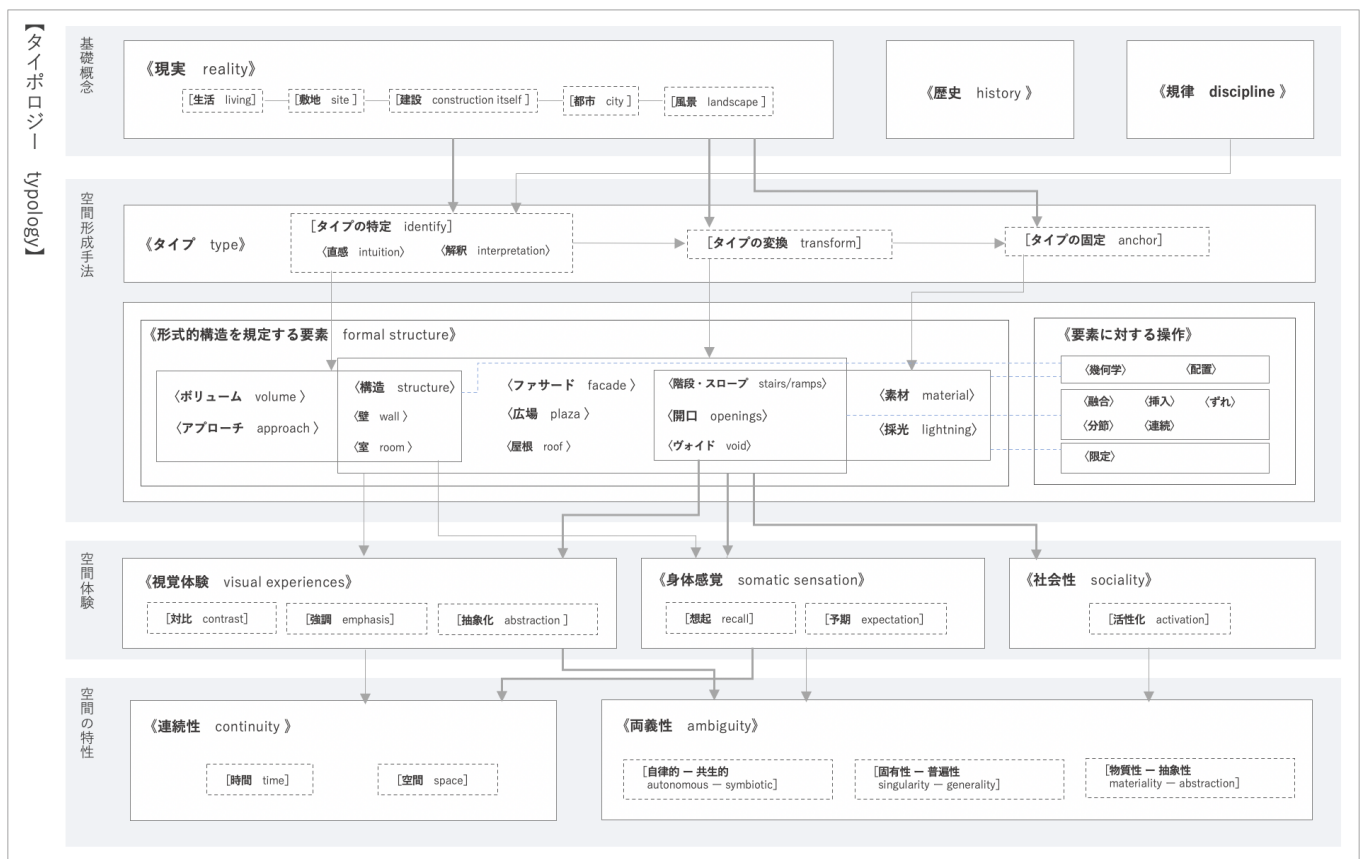


図4 ラファエル・モネオの【タイポロジー】に関する概念構造図

注

- 注1) Torres Rubio, Raúl : Territorio, Contexto y Sostenibilidad en la Obra de Rafael Moneo, 1972-1998., RIUCAM UCAM Institutional Repository, 2021

参考文献

- 1) Kenneth Frampton, Towards a Critical Regionalism : Six points for an Architecture of Resistance, *Revisited*, OASE, (103), 11-22.
- 2) Rafael Moneo, On Typology, *Opposition* 13, 1978
- 3) Shin-ichi OKUYAMA, Shin YAMADA and Kazunari SAKAMOTO: Spatial Conceptions of Architects on Contemporary Houses in the Articles, Study on Design Theories of Architects in Japan, *Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ)*, No.456, pp.123-134, 1994 (in Japanese)
奥山信一, 坂本一成ほか: 建築家の言説にみられる現代住宅作品の空間モデル, 建築家の創作論に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No.456, pp.123-134, 1994
(DOI: https://doi.org/10.3130/aija.59.123_1)
- 4) Shin-ichi OKUYAMA and Kazunari SAKAMOTO: Architectural Theories in “Shin-Kenchiku” after World War II, Thoughts on Housing and City, Design Themes, Spatial Conception by Contemporary Japanese Architects, *Journal of Architecture, Planning and Environmental Engineering (Transactions of AIJ)*, No.477, pp.101-108, 1995 (in Japanese)
奥山信一, 坂本一成: 戦後「新建築」誌における建築家の創作論: 建築家の住宅観・都市観・創作の主題・空間モデル, 日本建築学会計画系論文集, No.477, pp.101-108, 1995
(DOI: https://doi.org/10.3130/aija.60.101_4)
- 5) Shingo SUEKANE: STUDY ON CHARACTER AND TRANSFORMATION OF RUDOLPH SCHINDLER'S ARCHITECTURAL WRITINGS FOCUSING ON THEIR ISSUES AND COMPOSITION, *Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ)*, vol.73, No.627, pp.1155-1164, 2008.5 (in Japanese)
末包伸吾: 主題とその構成にみる建築家ドルフ・シンドラーの論考の特質とその変遷, 日本建築学会計画系論文集, vol.73, No.627 pp. 1155-1164, 2008
(DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.73.1155>)
- 6) 『建築講義要録』, ジャン・ニコラ・ルイ・デュラン (丹羽和彦, 飯田喜四郎訳), 中央公論美術出版社, 2014
- 7) Quatremere de Quincy, 建築歴史事典 (Dictionnaire Historique de l'Architecture), 1832
- 8) Colquhoun Alan, Three Kinds of Historism, *Opposition* 26, 1984